

なっていることが明らかとなった。このような実態が、中学校の通常の学級に在籍する特別な支援を必要とする生徒への支援の難しさの原因となっていると考えられる。

中学校において、特別な支援を実施することは難しい。調査の結果からは、以下の5点が指摘された。

- ① 支援をするには教員の数不足している
- ② 授業にまったくついていけない生徒がいる(小数・分数・九九も完全に習得していない)
- ③ 保護者が子どもの状態を受け入れない
- ④ 通級指導教室がない
- ⑤ 対象生徒のニーズがあまりにも多様で対応できない

さらに、中学生段階になると、相談機関や特別な支援を実施する教室等に出向いて支援を受けることや、教室内での支援員による支援を生徒本人が拒否することが多くなる。

以上のような問題を解決するためには、通常の授業の中で子どもの特性に気づくための方法の確立と、一人ひとりの目標を設定して個への対応を実行するためのシステムの構築が必要であることを提案した。

特別支援教育を進める学級経営の実際と工夫

河村 茂雄

本年度より通常学級で特別支援教育が本格的に開始されたが、特別支援が必要な子どもも含めた、すべての子どもたちの学級生活の満足度を高めるような効果上げている学校は多くはないと思う。

筆者は自ら開発した「学級集団分析尺度Q-U」を用いて、全国の10万を超える学級のデータを蓄積し、その中で特別支援が必要な子どもも在籍している学級のデータと、在籍していない学級のデータを比較検討したが、前者の学級の子どもたちの学級生活の満足度が有意に低いことが示唆された。さらに、通常学級に在籍している特別支援が必要な子どもの学級生活の満足度が他の児童生徒と比較して著しく低いことも示唆された。二次障害が心配されるのである。

通常学級で特別支援教育を推進するとは、「学級内の特別な支援が必要な子どもを教師がどう理解し個別対応す

るのか」というレベルではなく、「特別支援をはじめとした個別支援が必要な子どもたちの個別対応と通常の一斉指導をどう統合した教育実践を展開するのか」という学級経営の問題なのである。さらに、機能的な校内組織での支援がなければ、担任教師一人では十分な対応はできない学級集団も存在する。

次は筆者の研究から見えてきたポイントである。

- ・すべての子どもの個別支援レベル・内容の把握
- ・学級集団の状態の把握

それを基にして校内の全教員で共通理解と対応計画(学級経営計画も含む)を作成し、チームで行動する。そのために必要なのは次の点である。

- ・柔軟な校内のチーム支援体制の確立

通常学級での特別支援教育の推進は、一定の個別支援をしっかりと位置づけた学級経営を、校内の教員チームで展開していくことが必要であり、そのためのモデルとなる多くの実践例の情報を学校現場は切に求められていると思う。

指定討論

小中学校における特別支援教育の展開と課題

上野 一彦

特別支援教育への展開が全国で開始された。なかでも小・中学校におけるLD, ADHD, 高機能自閉症など、いわゆる「発達障害」への支援教育は大きな課題となっている。

今日、学力の低下、いじめ、不登校、授業崩壊など、さまざまな問題が公教育では山積しているが、「発達障害」はこれらの問題の背景要因としても色濃く関係していると思われる。

本シンポジウムでは、これら課題の解決にあたり、3人のシンポジストから、個別の支援計画につながる児童把握のあり方、中学校における現状把握、そして伝統的な学級経営と特別支援教育における個の指導との統合という視点からの課題提起がなされた。

指定討論では、それらを踏まえ、歴史的な流れと同時に、先進事例、そして軽度の知的障害を含む今後の発達障害教育とシステムに関する10の解決課題が提示された。